

「深刻」の日本近代文学史  
—終焉の予兆と横光利一をめぐって

文化科学研究科・日本文学研究専攻 佐山 美佳

# 「深刻」の日本近代文学史

## —終焉の予兆と横光利一をめぐって

文化科学研究科・日本文学研究専攻 佐山 美佳

柄谷行人は、「近代において文学が特殊な意味を与えられていて、だからこそ特殊な重要性、特殊な価値があったということ」は「もう無くなってしまった」と断言している。（『近代文学の終り』インスクリプト2005・11）。柄谷はさらに、近代に至るまで知識人の視野になかった「小説」という文学形式が、その地位を向上させ、先端的な意味を付加し、社会全体に対する影響力を持つようになるには、「それまでもたなかった知的・道徳的課題を背負い込む」必要があったとする。

報告者の研究は、明治二十年代後半に「深刻小説」を賞揚した批評家・田岡嶺雲らの言説によって文芸用語として広まった「深刻」という語が、出版ジャーナリズムや自然主義文壇の隆盛・衰退とともに意味を変奏させながら、いかに当時の作家や作品に影響を与えたかを考察するものである。おそらく、物語内容の「深刻さ」を重視する文学者の価値概念やジャーナリズム戦略の根本には、娯楽的要素の強い戯作文学からの脱却（＝文学に「特殊な意味を与える」こと）が企図されていたに違いない。

しかしながら、「深刻」重視の中心的エコールであった自然主義の衰退や、出版ジャーナリズムのさらなる拡大とともに、この語の意味は次第に実質を失い始め、単なる商業主義の紋切り表現に墮してゆくことになる。そして、大衆小説の勢力拡大と連動しながら、出版広告のボディコピーには「面白い」という表現が頻出するようになる。つまり大正末年から昭和初年にかけての、「深刻さ」（＝「知的・道徳的課題」）が「面白さ」（＝娯楽的要素）に取って代わられる状況が象徴するように、「近代文学の終り」への兆しは現れていたのである。

それでは、こうした終焉の予兆が見受けられる中、大正末年に文壇デビューし終戦まで人気作家として文壇に君臨した横光利一は、「深刻」という価値概念といかに対峙したのであろうか。じつは習作期の横光は、自然主義の牙城のひとつであり作家の登竜門的存在であった投稿雑誌『文章世界』の熱心な投書家であった。したがって、当然「深刻」重視の強力な磁場の中で雌伏していたわけだが、作家としての出発に際して、各出版社の商業戦略は錯綜し、売り手側の「深刻」路線は必ずしも一様でなかった。そのため、横光は各雑誌の「深刻」路線がいかなるものであるのかを敏感に嗅ぎ取りながら、大正13年の秋、金星堂および改造社の編集方針に適応した作品—「頭ならびに腹」と「愛巻」をそれぞれ発表していった。ここに「文壇（ジャーナリズム）」を「取引所」と捉えていた横光の、柔軟な身のこなしを見て取ることも出来よう。しかし、やがて文壇の中心的存在となっていく横光は、「深刻」に代わる新たな「知的・道徳的課題」を模索しなければならず、「純粹小説論争」の渦中に置かれて「純文学」と「通俗小説」の狭間で引き裂かれてゆく。